詩風柳多留全集 五

自 五六篇
至 七一篇

岡田甫校訂

誹風柳多留全集 五

自 五六篇 至 七一篇

三省堂刊

誹風 柳多留全集 五

昭和五十二年七月十五日　初版第一刷印刷
昭和五十二年八月　一日　初版第一刷発行

校訂者　岡田　甫（おかだ・はじめ）

発行者　株式会社　三省堂　代表者　上野久徳

発行所　株式会社　三省堂
〒一〇一東京都千代田区神田神保町一の一
電話　東京（〇三）二九三一三四四一（代）
振替口座　東京六一五四三〇〇

〈柳多留5・344pp.〉

©1977 by Hajime Okada

誹風柳多留全集五

目次

誹風柳多留

五十六篇……一
五十七篇……二三
五十八篇……四三
五十九篇……六七
六十　篇……八九
六十一篇……一〇九
六十二篇……一三三

六十三篇……一五五
六十四篇……一七三
六十五篇……一九一
六十六篇……二一三
六十七篇……二三五
六十八篇……二五七
六十九篇……二七七
七十　篇……一九七
七十一篇……三一九

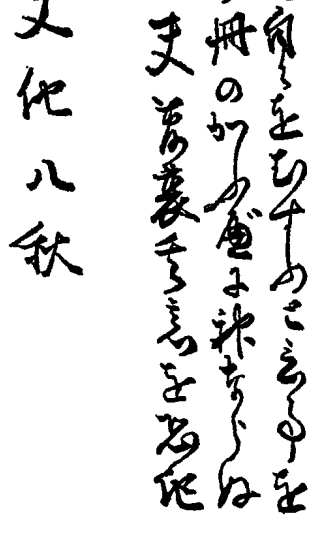
第五巻編集メモ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

柳多留

五十六篇

文化八未年刊



家内喜多留五十六編

前句の盛んなるや遠く信陽に
およぼしこたひ天白兩社へ
奉納の催し成りぬも正直を
第一とす撰者の意ならんと
東都の連衆の秀逸ノ冊に
……【五六・序】
かの句々をむすふと言事を
其冊のかふべに神ならぬ
凡夫菅裏其意を恐記

文化八秋

遊高評

有がたさ神代も聞かぬ水くゝり　松歌
萬代も響く大炊な御寄府也　横好
ぬれて干す衣が百の父と母　如雀
二人共文屋ハ秋の風を詠ミ　春駒
芋喰の和尚ゑご〳〵して歩行　青露
松竹の間から義理を述初メ　梅琴
御謠が濟と暦も細字也　木子（二七・26・竹二）
片乳ハ里子へひゞく暮のかね（鐘のこゑ・拾）　釣好（拾九・14）
……【五六・1】

産後十五人扶持に弟召出れ　竹笆
よめにくひ文か姑の自筆なり　如雀
轉宅と聞て万歳舌つゞみ　谷水
はせ寶の聲に戸棚をひよくら出る　仝
宝舟布袋の方へかしぐなり　菅裏
おきやァがれ馴染て見れば（二七）泣上戸　雨声（二七・22・花丈）
まり場から衣紋流しの面白さ　和文
夜來風雨ハ素壹分の頭痛也　里冢
きつとして武家へハ紺や明後日　里遊

其内て関羽緋桃の樣に醉　礫川
油屋を弟子にほしいと車胤いゝ　仝
はかり琴有りと仲達引かへし　賤丸
風の神に送られたのハ樂天　釣好
ひへ巨燵てもを雀をはぬくめ鳥　散売
卽吟ておもふ矢坪へ又當ル　其久賀
むつましい夫婦摺鉢目か潰れ　横好
仏檀の下に凡夫ハ氣が付ず　仝
黒砂糖道〳〵なめて高がらせ　牛住
……【五六・2】

村芝居じやうりぶちだとせなァいゝ　和里
亭主をは尻に他人ハ腹へのせ　雨旦
四斗樽ほとの泡のたつ鯨の屁　瓢金
またかりの切レぬを好む稲荷山　田夫

如雀判

からうたのしろさハすみにおつけされ　遊高
川に禹が有て洪水させぬなり　一露
切杭の噂が止ムと蛙なく　金牛
手廻しに足を洗ッた張子房　和文

二人とも文屋は秋の風を詠　春駒（1）
還幸の跡へ目出たい陳（マヽ）をとり　和文
雪氷筒切にする孝のとく　里梅
萌黄の顔てなま長い夢を見る　金牛
七景ハ見て一景ハ聞て寐る　春駒
方四里ハ民のとゞまる所なり　横好
万歳ハ柱に節を付ていひ　遊高
朝歸り須弥のいかりを海なため　木賀
鬼の留主嫩洗濯（せんたく）の水調子　釣好（二八・1022・志タ）（五〇・志タ）

……【五六・3】

素壹分ハ此雪にいざさらばなり　借ハかりたか傘ハ上へあき　金牛
くすし忠守茶にされて腹ヲ立テ　荒波もくたける石の御門番　里冢
伸をしい〳〵賣て遣る凧の糸　嫩の礼先キのが三分あとが貳朱　和里
呼出して我顔を見る二月堂　直をきめて結跏趺坐するかゞみとぎ　猿子
玉をあさむくお妾のはすは也　三日月て一句も出來ぬ蛙とも　谷水
なきにしもあらず禿に仕て育て　十三日鼠の巣から下女か文　三四
俎板に乗るハ目出たい仏の坐　半丁を讀書丸にておつふさぎ　谷水
兄分に廓の尻をぬぐわせる　あした取爪て薺をつんで居ル　有幸
長持や琴を植とく氣の長さ　冨士ひたい女も廿チくらいまて　春駒

……【五六・4】

有幸　御不勝手御臺所ハ紋つくし　黄峯
青露　花角力行司が霄の内ひらき　横好
雨旦　村芝居じやうりぶちだとせなァ言　和里（2）
里遊（武十三・29）　ぬれわらといふと新造もふ笑ひ　礫川
雨旦　文日堂斧
賤丸　わつか五字守れば廣き人の道　春駒
芋洗　雪氷筒切にする孝のとく　里梅（3）
和文　年の幕明キ正面が不老門　美徳
春駒　曇なく九里を手に取る御宝藏　横好

眞黑に成て仏も御味方　谷水
大鍋の松へつる程まわりみち　壽キ
白波が來たて千鳥ハ音を發し（におとろき）（二七）　里冢（二七・10・カテウ）
風の神に送られたのハ樂天（二七）　釣好（2）
厂門をあほう〳〵と烏ぬけ　和文
抑かねど來て賑かなたいこ樽（和・叩）　其末
萌黃の顏てなま長い夢を見る　金牛（3）
木の下陰を宿とする福壽草　有幸
口をすくさせ梅かえを娵しらべ　和文
……【五六・5】

もれ出るまて花娵ハいわぬなり　里梅
なきにしもあらず禿に仕て育て　賤丸（3）
金的と見込まれ矢文やたら來る　横好
新門をぬけると古く醫者に化ヶ　仝
心中ハ大師河原て見た女　仝
夜來風雨ハ素壹分の頭痛也　里冢（1）
朝歸リ須弥のいかりを海なだめ　木賀（3）
節分に精進落る角大師　雨二
瘦馬に三ヶの庄ハ荷か過る　如雀

兄ゑおんま尻持ハ妾なり（四九）（四九）　雨旦（四九・14、シクト）
淺黃うらすべきやうなく夜を明カし　和文
あられからぱつちの見へるやす礼者　春駒
節季いも忌中の門トハせきぞれず（せきぞろ）　牛住
迫ひ羽子のそれ矢調市ハ盆て請　猿子
美しい天广に息子見入られ　女声
直をきめて結跏趺坐するかゞみとぎ　猿子（4）
火の病迄ハおもしろ盡しなり　五蝶
玉門へ玉を宿して輿に乘り　松歌
……【五六・6】

はつかりの丁ハ米にも花か咲キ　有幸
桐の木を伐る頃娘ずいか明キ　里雀（二六・39、喜水）
九牛が一毛もなし長つほね（チ（二六）　如雀（二六・7、窗梅）
かの所コハ武藏〳〵と一ッきり（い（二六）　雨夕

（以下空白）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文日堂判

菊月の晦日ハきくへ鎭坐也　猿子
五日目に風鈴の鳴るおだやかさ　和里
四里四方水も四角にしみわたり　猿子
夜學ても胸ハあかるき夏と冬　木子
松風に吹ちらされる司馬が勢　里冢
鶯も蛙も鳴かぬ小倉山　賤丸
儒を穴に仕たから秦のやみになる　和文
天竺へ梅から廻る日の永さ　青露

……【五六・7】

南ミ風雪の達ハ無一物　雨旦
人知らぬ酒もり味噌て名が殘り　松哥
長安の酒屋李白に倒される　木子
清盛ハ仏なぶりの元祖なり　金牛
なまくらな武士ハ青砥に合ィかねる（に（一三）ハあわぬ也（一三））　如雀（一三・32）
鶯の聲に臥竜も目をひらき　木子
八百て呼ひ八文て送るなり　青露
香箱を明れば琴の爪でなし　金牛
夜るの冨士屏風が浦でふし拜ミ　猿子
口切の使其手ハくわぬなり　東烏
鳳凰やきりんが出ると獏ハやせ　万仁
駕賃ハ壹分とお松岡づもり　和文
お七がたい夜ありもので客を呼ヒ　金牛
木場の釣つれぬと釣が三匁　文蝶（明四・義1）
牛の角文字ハ役者も女中向キ（御殿（六四））　如雀（六四・3、雨旦）
兵粮か矢さまをぬける花の朝　雨旦（三二・23、ス、メ）
四斗樽へ矢さまを明て下戸を入　横好
黒染の上りたばこてつやをつけ　黄峯

……【五六・8】

天窓づくしで龍宮のやくはらひ　金牛
ひな棚の家主らしい治郎左衞門　雨旦
先き行ハせまいと亭主乳を貰ひ　文蝶（五・28）
質艸ハ逆おもだかゞ初めなり　如雀（四〇・8、大京）
ぬるそうな亭主茶の下焚せられ　雨旦
年に二度年季大赦に行われ　梁主
表門よりうら門ハしまりよし　横好
茶臼かとおもへハ巴首をかき　如雀
大尾ほうろく頭巾かわらけがきつい好　里梅

如雀評

叡山へ其日に勅使四度たち　礫川
かく年に夫婦別あるおたやかさ　雨夕
萩大名を笑ってる御大名　金牛
非修非學切りていさかい殊勝也　青露
さかんでハ雨おとろへて食を乞　散亮
白酒て娵桃園に義をむすぶ　里冢
文金てひと日大キな門を〆　雨声
紫や水も箱から出してそめ　和里

……【五六・9】

御櫛上ケ芋を結ひ上ケ隙に成り　文蝶
花咲ケば(二)長閑さや諏訪の親類遠くなり　里冢(二・8)
なわばりをしい〳〵鶴の評義也　和文
でハござるまいと藥師寺にが笑ひ　柳雨
目隱しのひなハ手の鳴る方へ賣レ　雨旦
素見さと十軒店へ女房行　礫川
あまといつてもしやァ〳〵と素肌武者　金牛
飯もりの先キに大もりいゝ地名　香貞
又雪の寸かとお針かしてやり　柳雨

けつこうな繼穗をしたハ源左衞門　釣好
木場の釣つれぬと釣か三もんめ　文蝶(8)
落穗集腰元拾ひ〳〵よみ　横好
左近それお手を〳〵と石田いひ　里遊
もめん荷のうしろに一ッへの字の木　金牛
四輪車と四ッ手和漢の軍師也　青露
田樂ハ狐色より引かへし　釣好
人知らぬ酒もり味噌て名か殘ッ　松哥(7)
雪中て高ひねの出た鶯菜　煙幸

……【五六・10】

主上を初メ奉りよこに這ひ　金牛
汗水も溜れハ白ィ水流れ　雨旦
四斗樽へ矢狹間を明て下戸を入　横好(8)
稲妻でくわら〳〵〳〵と藏を明　丸竜
鶴ほとに小判を付る鬼子母神　和文
馬鹿野良いもりを五ッ六ッやき　金山
夜講釈しびれの切る水こでん　和文
出し置を下女ハとやせんかくやせん　丸竜
夫迄ハ女帝虵が蚊をきこし召　由良人

栁雨評

無敵とハ治まる御代の流義なり　春駒
後悔ハ四馬の車の跡に立チ　仝
和哥の二字浦山かけて風雅也　青露
物がたり迄も若菜ハ二葉なり　金牛
師の坊の七尺四方水がにけ　一露
繁昌さ今ハもへ出る艸もなし　賤丸
松ハげに幾世も杉のへんを取り　眉長
是へ御加筆と兼好下書を見せ　金牛
……【五六・11】

其板ハみんな正ヵ目の御捌キ　木賀
子を見る事親にしかす直な板　和文
坤の卦が出たで康成(マヽ)腕をくみ　遊高
虫が知らせて賴光の寐くるしさ　金牛
花の敵立テ切ておく屏風坂　辻木
ちり込た花香奠をくみなをし　眉長
大あらめさつくと着なす源左ヱ門　和文
鉢の木が無ィと粟津を貰ふ所　礫川
粟飯で大祿をつる源左ヱ門　谷水

下乘ても桂馬の次へ鑓を立テ　雨夕
人ゝ間ゝに霜がかゝるとしぶくなり　一夕
須田丁で秋ハ木へんの市が立チ　遊高
和國橋あたり娘のゑもん坂　雨夕
母(四〇)親ハ弓子ハ弦に寐る枕がや　古栁(四〇・28、亀鳥)
碁仲間に打て付たる春の雨　里冢
花の山師匠の連るまゝ子算　木子
花の山師匠扇て下知をする　竹笆
一本宛さづけて師匠花見也　森烏
……【五六・12】

若衆を休ませ野郎を取替る　松歌
摺鉦入りの相方で米相場　金牛
弁當をいてふでひらく花の雨　谷水
長曾我了左官の先祖かとたわけ　笠下
明キ樽と生醉下戸の荷やつかい　黄峯
花ハ見せ實で身をすぎる梅やしき　梁主
長州ハ筋目正しき遊女也　東烏
旅おくり大和をめぐるほど遣ひ　和文
こわひ事庭籠の口に鉄虫　雨夕

蛇遣ひへびをつかへばいそがしき　水治
茶斗で盤(マヽ)若しるこを白眼でる　松門
足ではたらく油揚の追い落し　香貞
土手節の馬士ハあみ笠のせて行　杓子
羅漢の後ろ三階のさゞい堂　其流
村芝居さくら生どる妹脊山　谷水
精灵へすき切ゝのある膳で上ヶ　横好
むく鳥を鴨に仕立る松の内　雪雫
葉しようがで下女ぬかみそへ柵をふり　金牛

……【五六・13】

こん地に白ヵ立ヵ葵こま廻し　梅鳥
心太ひよろ〳〵とかしこまり　有幸
上の字の水で中の字下女覺へ　雨夕
下女芝居極逆上の躰に見へ　青露
主人ゝ相知らずとハ下女いわせぬ氣　里冢
三會目ずつとぽつぽへつゝぱいり　里梅〔末四・3〕
横に來て舟へ狸を乘せる也　礫川
芋の幽灵聲有てかたちなし　散売
紅裏へ羽二重こしのしみか付　田夫

御道具を廣間へ乳母ハぐつと入　半下
佐久間の下女ハ箔(笹)付ヵのちゝれ髪(がみ)　如雀

文日堂判

羽根を干す鵜ハ御たもんの前朱雀　横好
湖と冨士ハ日本の鼻と口　柳雨
目出度さハ產所を的に弦の音　雨夕
結ばれる上に八月の雲が立　金牛
三面ゝをすて一面に御握り　雪雫
細〳〵と兜をぬいて和哥の傳　青露

……【五六・14】

月を呑日を產むよふな廿山　新右
御車に廻ゝ合せのいゝ高尾　梅鳥
七人一坐酒盛ハうしほなり　水治
暑ィ事娵のちりけの灸か見へ　雲路
坐禪より名の高いのハ腹籠ゝ　水治
さり狀を傳法臨(?)のよふに書ヵ　谷水
最ふ押せぬ年も目出度御箆(うら)役　横好
雪の竹いんぎん過て通られず　柳雨
唐崎ハほこりのたゝぬ地名也　ヤマキ

殘りてハ貞女妖婦も同し石　可興
なまぐさい風て冥途の鳥が出る　和里
罷歸るが來んしたと禿言ゝ　雨栁
錢龜もあぶなく逃るなめり川　雨旦
こわひ事庭籠の口に鋏虫　雨夕(12)
膝からハ少しこぼれて水調子　雨旦
御脊中を流しましやうと長田言　經芝
過去帳へ利上して置御齋米　可興
七色をあつめて辛ひ世を渡り　竹笆
……【五六・15】

あれさおゆるし遊はせと百合の花　横好
病上り神酒へ切火も力わざ　栁雨
黑猫のしはられて居るむこひ事　雲路
稗蒔の細工烏賊さま鷲のよふ　里梅
骨と皮医者見所がないと言　釣好
弟ハ桃の都の袴たれ　和文
古井戸へ利休すんてにはまる所　是樂(三六・21、是樂)
むぐらもち一寸ゝ上ハ地ごくなり　喜丸
留桶に膝直し程湯屋で打　由良人

一ヂ膳籠でうで卵く　香貞
冨士の裾二十四郎が大手がら　木子
死た金生かして遣ふ化た医者　松雫
猫の額におしろいが咲みだれ　森烏
千兩と三分が堀江丁に見へ　雨栁
いゝ天氣串差首のさらし物　一艸
四人が小貳朱にあたる汗をふき　東烏
鼠木戸化して鵜の番と成　如雀
三國へ屁を一ッ宛ひつて逃げ　金牛
……【五六・16】

人魂て草りをさがす樂屋番　有幸
むさ判を湯屋水舩へ二ッ浮け　半下
女の身なけおどざとも言ッへし　黄峯
天然さ輿屋の亭主うれい面ヲ　森烏
心太ひよろ〳〵〳〵とかしこまり　有幸(13)
吳ぬならかのと妾へ母の文　和文
芋の幽灵聲有てかたちなし　散亮(13)
よしなよの上のよの字ハ下女置字　粱主
まんぢうハ蕎麥に八文高くうり　芋洗

むごひ事下女三文で子をおろし　雪洗（安九・禮6）
御道具を廣間へ乳母はぐつと入　半下（14）
鉄炮であつたら鳥居押ッたおし　ヤマキ
横根（大尾）に扳て名山につゝがなし　經芝

（以下空白）

……【五六・17】

春駒評

光陰を矢とおもわれぬ日の永さ　礫川
神に飛ひ仏に降る梅の花　芋洗
羽團扇で靈の翼へ下知をする　三松
草化してむかし逃たる水を呼　散亮
扨遠ひ一里と言て除（マヽ）福來る　和文
源氏より奥でハ光る源之介　雨旦
四三から中ぬきにする能ィ桟敷　里梅
扶桑應な山たと唐でそねむ也　雨夕

立ッ鳥に筆を殘して一首よみ　柳雨
不順の時候すゝはきに端午也　釣好
望まれて爪をかくして猫を出し　ヤマキ
口に手があり衿元に足があり　一艸
人篇（マヽ）に我もく〳〵と雨やとり　里梅
いつからか川ばた駒を通す也　夢中
題目の樣に芝海老串へさし　里遊
得こそハやらじ出直せと飛車をなり　柳雨
ア、つがもねへ海老の出る木場の釣　梅鳥

……【五六・18】

つがもなく利くと三升の灸をすへ　雨夕
蚊やうりハやはりひろがる聲を出し　紀樂
藥種やの調市現金湯（トウ）とよみ　志丸
樂屋でハ上席をする平衛（右）門　竹笆
來付ヶた商人ちと來ぬと死ッだろふ　横好
長安の居酒屋葱に羊なり　和文
柿の皮むいた自慢に立て見せ　里松
重てハ責られるおもひ鍋の數　柳雨
一箱ハ晝一はこハ夜落る　如雀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com